

タイタニックの足跡をたどるフェリー旅

会員 福富 廉

2024 年の夏、イギリスを旅して、結果的にタイタニックの足跡、船籍港のリバプール／建造地のベルファスト／処女航海発航地のサザンプトン、をたどることになり、其々の港の出入港も経験してきた（学会ニュース 2024-170（1212） 【イギリスのレポート（第 2 弾）「古き豪華客船の足跡をたどって」】）。そこで、次にヨーロッパに出かける際は、2 つの寄港地、フランスのシェルブールとアイルランドのクイーンズタウン（現在のコーヴ、同国第 2 の都市コークの外港）に立ち寄ってみようと考え、それらの港を使うシェルブール～ダブリン（アイルランド）航路とコーク～ロスコフ（フランス）航路のフェリーにも乗って、港の出入りも見てくることができた。

1. シェルブール

パリからシェルブールへは直通列車もあるが、先にルアーブルに立ち寄ってから行ったので、いくつかの駅を経由することになった。駅と港は少し離れているが、港の近くに宿をとったため、内港の漁船やヨットを見ながら歩いて行った。とても落ち着いた感じの港町だった。

港は西側が軍港で、中央が大きなヨットハーバー、東側がフェリーターミナルと洋上風力発電装置の基地、という感じで、魚を売る屋台があったり、遊覧船も走っていていい港だった。ただし、いわゆる貨物船の類はいなかったが、沖合に長い防波堤があって、小樽港のような感もあった。

フェリー・ターミナルの傍にシテ・ド・ラ・メール（海の街）と言う観光施設があり、「タイタニック」に関する展示の他、昔の原子力潜水艦の見学、近代的な水族館の見学、元の鉄道駅での VR 体験などができる。

「タイタニック」に関する展示は現役の客船ターミナルとしても使われている建屋の中にあって、船内を模した内装の中に数多くの展示があった。2 階はオーシャン・ライナー時代に実際に使われた広大な荷物ハンドリングスペースで、昔の格調さが見える立派な建物だが、確か「タイタニック」の寄港後にできたものだったという説明があったように思う。1 階は元は鉄道の駅だったそうで、半分くらいのスペースを使って、VR で当時の様子を体験できるアトラクションがあった。また、屋外のドックに保存されている昔の原子力潜水艦「ル・ルドゥタブル」（1971～1991 年就役）は内部を見学できるが、原潜とあって巨大で、例えば、屈まなくても隔壁を通ることができるほどで、居住空間もゆったりしており、呉の「あきしお」等とは比べられない程だった。ちなみに、中央の原子炉部分だった場所のみ輪切りで切断されて搬出されており、ここだけ継ぎ足しのがらんとした空洞だったが、船尾から船首まで全て見学できていた。



内港から客船ターミナル（シテ・ド・ラ・メール）を見る



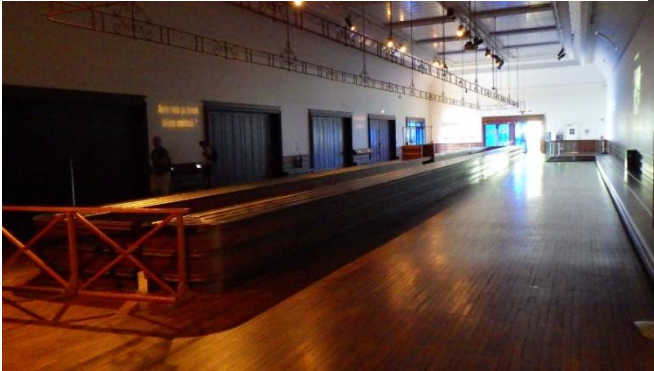
広大なヨットハーバーの一部と川の向こうの客船ターミナル



客船ターミナル（シテ・ド・ラ・メール）正面 右側が岸壁



客船ターミナル1階中央



客船ターミナル2階の昔の荷物ハンドリング・スペースの半分



客船ターミナル2階の外部デッキ



客船ターミナル1階博物館の一部



退役して公開されている原子力潜水艦「ル・ルドゥタブル」



シェルブール港の遊覧船「ADELE」



ずんぐりとかわいい地元の漁船

シェルブール港のフェリー



入港してきた
アイリッシュ・フェリー
「W.B.イエイツ」



入港してきた
ブリタニー・フェリー
「コンテンティン」
(22,308GT)
(左と下左)
この時は
アイルランドのロスレア行き



入港中の
ブリタニー・フェリー
「バルフォア」
(20,133GT)
(左と上右)
この時は
イギリスのプール行き

2. シェルブール〜ダブリン航路 アイリッシュ・フェリー「W.B. イエイツ (Yeats)」(51,388GT)

以前から、アイリッシュ・フェリーのフラッグシップ「ユリシーズ」(2001年建造 50,938GT)に乗りたと思っていたので、それより新しく大きく、アイルランドの詩人の名を冠した「W.B. イエイツ」(2018年建造 51,388GT)に乗れるのはその点で好都合だった。

ターミナルへはバスもあったが、鉄道駅まで戻る必要がありそうだったので余裕を持ったつもりで歩いて行っただが、道を間違えて港の鉄道引込線を渡ることができずに遠回りとなって焦ったが、何とかチェックイン時間の1時間前には間に合った。徒歩客は船内までバスに乗って乗船した。船は16時30分出港の10時45分着なので、夏のこの期間は明るい航海を十分に楽しめる。最上デッキに上がった

ら、もう乗客でいっぱい、飲み物を売るテーブル等もあって、まさにクルーズ船の気分だった。

その後、船はイギリス海峡を西へ向かい、いくつかの大型コンテナ船やタンカー、また、カーニバルの大型クルーズ船とも反航したが、いずれもやや遠かった。その後、船はイギリス南西端のランズエンドを交わすわけだがわけだが、さすがに深夜なので残念である。

船のアコモデーションは4層で下2層がキャビンスペース、上2層がパブリックエリアで、上の階の船首のラウンジと下の階の中央部のバフeteria式のレストランが主な居所だったが、海外フェリーの常として何も購入しなくても終日居続けることができ、ラウンジでは、ソロ演者ではあるがマジック・ショーやバンド演奏が行われていて、ゆっくり飲みながらの航海はとても楽しかった。また、下の階には、朝食も提供されるテーブルサービスのレストランや、有料のクラブラウンジがあって、なかなか素晴らしい船だった。一方、今回、私は一人旅なので、キャビンとはらずに下の階の後部にあるリクライニングシート席を取ったが、ここはシネマルームや小さなラウンジもある開放的な空間で、指定席では無かったので、ちょっとくつろいだスペースでは無かったように感じた。



シェルブール港の防波堤



シェルブール港の客船ターミナル 左は「コンテンティン」



出港時に出ていたデッキ・バー



最上階の外デッキ



デッキ 11 の船首にあるモード・ゴン・バー＆ラウンジ ラウンジの一角でマジック・ショーも（右写真）
モード・ゴンは詩人イエイツの恋人で、アイルランドのジャンヌ・ダルクと称される女性活動家・女優の名前



デッキ 10 中央にあるレストランのボイルンズ・ブラスサリー
ボイルンも人名と思われる



下船時の連絡バスから見た車両甲板の様子
ヘッドレスのトレーラーが並んでいた

3. ダブリン

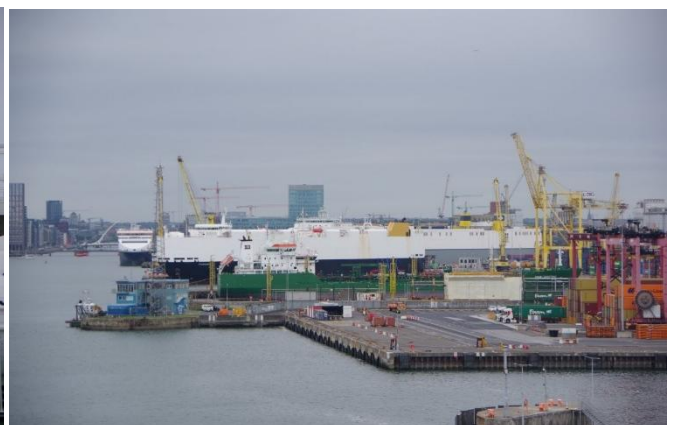
アイルランドの首都ダブリンのフェリー・ターミナルは街の中心を通るリフィー川の一番河口にあり、その奥がコンテナ船他の商港となっている。フェリーとしては、シェルブール行きよりは、むしろ、対岸のイギリスのホリーヘッドとの間の大型フェリー航路の方がメインで、アイリッシュ・フェリーが 3 隻で 1 日 6 往復、ステナ・ラインが 3 隻で 4 往復、何れも片道 3 時間半で結んでいる。

ダブリンの港そのものは直接アクセスできなくて十分に見ることはできなかったが、リフィー川の周りには運河等があり、保存帆船「ジニー・ジョンストン」も係留されていた。

もう一つ、南に電車で 25 分程行ったところにダン・レアリーと言う古くからの港があり、ここは行楽地でもあって、ヨット・ハーバーとダブリン・クルーズ・ターミナル、そして、国立海事博物館がある。ただし、小さな港なので小型船しか入港できず、大型船はこの沖に錨泊することになるが、行った日には、「STAR LEGEND」(12,995GT) が着岸していた。また、国立海事博物館へ行ってみたら、これが元はれっきとした教会の建物で、元は 1843 年に造られたマリナーズ教会で、1974 年に海事博物館になったものだった。展示は古いものが多かったが、元は教会だったとあって、展示方法がとてもユニークだった。



ダブリン港口 リフィー川の河口



ダブリン港 フェリーターミナルの奥の商港



ダブリンのフェリー・ターミナル 奥のコンテナ・ヤードの手前もフェリー岸壁



「W.B.イエイツ」に続いて「ジェームス・ジョイス」、「ステナ・エストリッド」と続いて入港してきた



後から入港中してきた
ホリーヘッド (UK) 航路
ステナ・ラインの
「ステナ・エストリッド」
(40,500GT)



ダン・レアリー港の「スター・レジェンド」

アイルランド国立海事博物館（ダン・レアリー）



ダブリン・リフィー川の船々



保存帆船「ジニー・ジョンストン」



係留レストラン船「シル・エアン」 1961年製の客船



リバー・クルーズ船



水陸両用船「オーディン」

4. コークとコーヴ

「タイタニック」の最終寄港地クイーンズタウンは、事故後の 1922 年にアイルランド語の元の表記のコーヴ (Cobh) に戻されて、現在はその名前で呼ばれているが、アイルランド第 2 の都市コーク (Cork) の外港であり、クルーズ船の寄港地としては一般にコークと表されている。ダブリンからコークまでは特急列車で 2 時間半、そこからコーヴまでは列車で 40 分と言う距離で、コーヴ駅は海に面していて、真横がコーク・クルーズ・ターミナルとなっている。「タイタニック」が寄港した当時は着岸はできず、港のある湾の外に錨泊して港からは舢舨で乗下船した。この港から乗船した人は 123 名、うち生存者が 48 名なので、亡くなった人が 75 名と言う内訳となる。

この街には、鉄道駅から近い順に、タイタニック・ヘリテッジ・センターとタイタニック・エクスペリエンス・コーヴの 2 つの博物館があり、前者はこの港から送り出した多くの移民と「タイタニック」に焦点を当てた博物館、後者はホワイト・スター・ラインのオフィスと同船に乗下船する人々の待合所兼ねた建物跡を利用した、ガイドツアー形式のアトラクション施設である。後者の近くに「タイタニック」の追悼記念碑があり、さらに東に 20 分程歩くとタイタニック・メモリアル・ガーデンがあり、そこから湾口の先が見えた。つまり、その付近に「タイタニック」が錨泊していたということである。なお、このガーデンは 2014 年に「タイタニック」の寄港 100 周年を記念して造られたもので、おそらくこの港から乗船したであろう人々の名前が記された記念碑があった。また、その傍らには、「タイタニック」に乗船していて、色々物議をかもした、ホワイト・スター・ラインの経営者イズメイの記念碑もあった。

湾口はとても狭い。ここに入港するフェリーは湾に入ってくるとターミナルの方向とは逆の方向に大きく回ってからコーヴの街に沿って進み、さらにぐるっと回り込んでターミナルに進入する。コーヴの街の高台で待っていると目の前を進む姿が圧巻であった。

また、「タイタニック」の追悼記念碑の近くには、ドイツ軍の U-BOAT の攻撃を受けて沈没し第一次世界大戦へのアメリカ参戦のきっかけとなった「ルシタニア」の遭難記念碑もある。同船は、コークから南西へバスで約 1 時間ほど行った街キンセールの沖で沈没しており、「タイタニック」と併せて追悼するためにここコーヴにあるようだ。ちなみに、キンセールは国際的なヨットハーバーもある風光明媚な街だが、そこにある聖マルトーズ教会には事故で亡くなったスチュワード 2 名の墓があった。また、キンセールから、もう少し先に行った岬、オールド・ヘッドにはルシタニア博物館も建っている。

コーヴの街の近くにはリー川があって、中小型船がコークの街の中まで遡っていける。その途中に対岸に渡るカーフェリー航路があって乗船して来てみたが、造船所等もあっていい景色のところだった。



コークとコーヴ 周辺の関係図



イギリスの調査船「コマンダー・アイオナ」
コーヴから川を 10 数 km 遡ったコークの鉄道駅前に着岸



キンセールの港巡り遊覧船「スピリット・オブ・キンセール」



クロス・リバー・フェリーのカーフェリー「グレンブルック」 徒歩客片道 3€



クロス・リバー・フェリーの西側の乗り場の傍にある外輪蒸気船「SS シリウス」のパドルシャフト
同船は、コークからニューヨークへ機力で最初に大西洋横断をして、最初のブルーリボン賞を得た船で、
出発地のコークの近くであり、船長の故郷だったことで、この記念公園が造られたようだ。



カーフェリーのコーヴ側には造船所があり、
艦船や遊覧船の修理をおこなっているようだった。



フェリー航路を通過する
コンテナ船「ペガサス J」(セント・ジョン船籍)

コーヴ



コーヴ湾内にある要塞島・スパイク島へ行く遊覧船「カリクラフト」(左)と「スパイク・アイランド」



コーヴ駅&コーヴ・ヘリテッジ・センター
駅の海側がヨーク・クルーズ・ターミナル



ヨーク・クルーズ・ターミナル
左端の崖にタイタニック百年記念の看板がある

・タイタニック・ヘリテッジ・センター



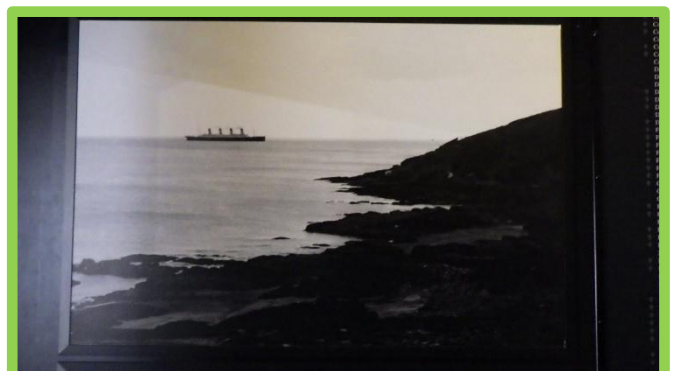
館内の様子



「ルシタニア」遭難に関する展示 中央に模型



「タイタニック」コーナーの入口



コーヴ沖で錨泊する「タイタニック」最後の写真

・タイタニック・エキスペリエンス・コーヴ



タイタニック・エキスペリエンス・コーヴの外観 建物の海側にタイタニックの乗客が艇に乗り込んだ桟橋がある（右写真）



館内の模型・展示

・タイタニック・メモリアル・ガーデン



（左）
右写真の外柵から一段下
と湾口を見たもの
湾口の外側に
「タイタニック」が錨泊
していた
（右上）
ガーデン入口からの様子
（右下）
アクリル板の記念碑に
コーヴからの乗船者の
名前が記されている

・その他



タイタニック・メモリアル（追悼碑）

ルシタニア・メモリアル（追悼碑） 左写真のすぐ傍

5. コーク〜ロスコフ航路 ブリタニー・フェリー「アルモリック (Armorique)」(29,468GT)

夏場、この航路は週2便で、本船「アルモリック」と「ポン・タヴァン (Pont-Aven)」が週に1往復ずつ走っていた。後者の方が豪華フェリーとして名高いが、日程の都合から「アルモリック」に乗船することになった。もちろん、後者には乗っていないので比較できないが、この船も十分なクルーズ・フェリーだった。船は、夕方16時にコークを出港し朝8時にフランス北西部の街ロスコフに入港する航程で、時差が1時間あるが、こちらはロスコフの入港時間以外、全てアイルランド時刻で運航がなされていた。両港ともに徒歩客の乗下船はボーディングブリッジ。

コークでは貨物船に挟まれた狭いバースから出港し、前項で記した航路を進んで行く。陸からとは逆に、コーヴの街に沿って平行に進む風景は見事で、多くの乗客が最上デッキに出て楽しんでた。その時、何かの呼びかけがあったと思ったら、デッキにいた乗客が集まって街を背景にした全体写真を撮ることになり、その写真は後でプリントされてもらうことができた。その後、狭い湾口を通過して、「タイタニック」が最後に錨泊した付近に抜け、大西洋に出た。

この船の場合は、上の公室階の船首にレストランがあり、中央部がラウンジ、下の公室階の船首がリクライニング指定席で、その後方にシネマやお店等があった。あまり混んではいなかったせいか、リクライニング席の部屋の中では席では無くフロアに横になって寝ている人が半分以上いたのに少し驚いた。「W.B. イエイツ」と本船を比べると、前者のアコモデーションの方がクルーズ船の配置に近くて、ラウンジやレストランがはっきり区別されていて、フルサービスのレストランもあると言った豪華な感じで、本船はいわゆるカーフェリーの配置と言う感じだったが、セルフ・レストランのサービスや内容、船の雰囲気等は本船の方が良かったように思う。あと、「W.B. イエイツ」は2層のキャビン階が公室階の下にあるのに対して、本船は上にあるので、屋上デッキにでるのが多少つらかった。



入港してきた
「アルモリック」

(下左)
右奥の湾口から左から
大きく回って、コーヴの
街に沿って進んで来た
(下右)
海軍基地のある
ホールボーライン島との
間をターミナルに向かう





着岸中の「アルモリック」



ターミナルから続くボーディング・ブリッジ



いよいよ出港



中央奥がターミナル とても狭い



コーヴ駅沖からコーヴの街沖へ進む
前ページの入港写真は中央の駅の上の道路脇から撮影



コーヴの街の中心部 右奥が聖コールマン大聖堂
左手前がタイタニック・エキスペリエンス・コーヴと栈橋、
中央付近に両追悼碑、右手前がスパイク島行き遊覧船乗り場



タイタニック・メモリアル・ガーデン（全景）の前を
通過した後、右へ転針して行く 中央左の建物は信号所



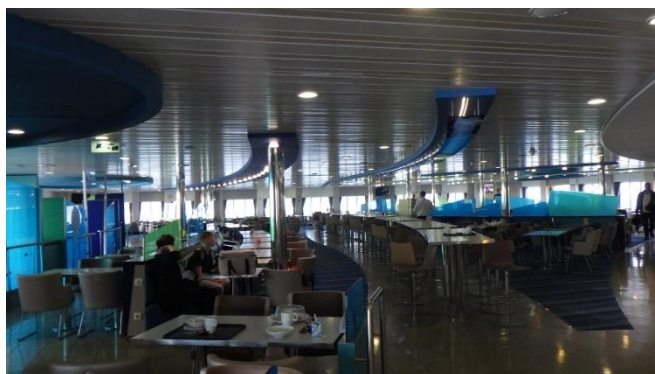
湾口東側のロッチズ・ポイント岬と灯台
「タイタニック」乗船者が最後に見た間近な陸



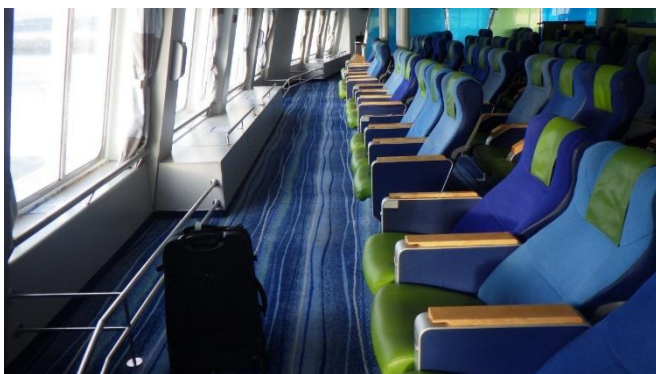
コーヴの街並みを背景に
露天デッキに乗客が集まって撮影
写真上に
「デッキ 10 フォト・チャレンジ
新記録 約 190 名」
のキャプションがある
後で A4 用紙に印刷して配布された



最上露天デッキの様子



7デッキのセルフサービス・レストラン 船首側（左）と内部、左側がサービスコーナー



6デッキ前部の指定リクライニング席



7デッキ中央部のラウンジで行われていたマジック・ショー

到着したロスコフは小さな港町で、ここから鉄道駅のあるモルレまでバスで 30 分ほどかかった。モルレはイギリス海峡に面した湾から、さらにモルレ川をかなり遡った内陸にあるが、狭い川沿いにはヨットがあふれており、街の上を貫くとてつもなく高い鉄道橋が圧巻だった。



ロスコフ港



ターミナルに後進で着岸直前



ロスコフの最寄りの交通要衝モルレ市街
中央奥が 1863 年にできた高さ 58m のモルレ鉄道高架橋



モルレ市街のモルレ川沿いのヨットハーバー
海に出るまで 10km 程ある